

Trends in Psychiatry

Theme

『精神医学の概念デバイス』

書籍



書籍紹介

『精神医学の概念デバイス』

著者：村井 俊哉

発行：創元社（2018年）

脳科学全盛の時代に精神医学の混沌から目を背けることなく、精神医学のサブジェクトマターを抽象概念とする立場から考察し、「精神医学とは何か？」という議論に一石を投じる1冊。本書では、精神医学を考えるツールとして“概念デバイス”というコンセプトを提唱し、著者が過去に発表した論文に41の概念デバイスを挿入しながら著者自身が口を挟む三重奏の展開で、精神医学の混沌を整理する試みがなされている。

これまでも精神医学を考察された書籍を発売されていますが、本書はどのような意図で執筆されたのでしょうか。

私が入局した1991年頃、精神分析学や精神病理学などの難解な書物を読み漁り、「人間の心の奥深いところを科学だけで割り切れるものか」といった発想をもつような、いわば文系の風潮が精神科にはありました。こういった他科とは異なる精神科の状況に対して、当時の

私は「はたしてこれでいいのだろうか？」と疑問を抱いていました。その後、脳科学が大きく進歩した現在、精神医学は医学の一分野として理系の学問となり、精神疾患の治療だけでなく学校や職場との連携など非常に現実的なことも行うため、以前のような精神科医の特殊さは薄れてきたように思います。しかし私は、そうした現状にもまた疑問を抱き、「精神医学はわかりづらく難解で混沌とした部分をもつ

ものなのではないか？」と考えているのです。

この精神医学の難解な部分を見極めず、無理にわかりやすくすることもなく、難しいままに精神医学を考えてみるというスタンスで過去に執筆したものが『精神医学の实在と虚構』と『精神医学を視る「方法」』で、今回も同じスタンスで臨みました。本書『精神医学の概念デバイス』では、過去の精神医学に回帰するのではなく、現在精神医学の中心